

銀座のカフェ黎明期における「台湾喫茶店」と女給

小 関 孝 子

“Oolong Tearoom” and Waitress in the Early Days of Café in Ginza

Takako OZEKI

要 約：筆者の研究関心は、ナイトクラブなど社交料飲業の前身といわれている明治期のカフェが、なぜ女性による給仕を伴って受容されていったのかという問いである。本稿は、この問いを解明するための基礎資料として、明治後期に銀座に登場したカフェに関する情報を整理したものである。日本で最初にカフェという言葉を使用した店は、1911（明治44）年に銀座にオープンした「カフェ・プランタン」であるが、初めて女給をおいた店は1905（明治38）年12月に銀座にオープンした「台湾喫茶店」であったというのが、飲食文化史の研究においては定説である。しかし、女性による給仕自体は「台湾喫茶店」以前から牛鍋屋でもビアホールでも行われていた。それにも関わらず、「台湾喫茶店」が初めて女給を置いたとされているのはなぜだろうか。「台湾喫茶店」の現場を切り盛りしていたおかみさんのインタビュー記事や永井荷風の日記によると、「台湾喫茶店」のおかみさんが1904年の米国セントルイス万国博覧会で洋行した元新橋芸者であったことがわかる。元新橋芸者である彼女がセントルイス万国博覧会において世界各国の人々を接客したのちに、「台湾喫茶店」の現場を指揮したことは、接客における日本近世文化と西洋文化の最初の出会ひであった、と捉えることができるだろう。

キーワード：カフェ、銀座、台湾喫茶店、女給

はじめに

2020年、世界は新型コロナウイルス感染拡大の脅威に見舞われた。銀座に代表される繁華街の「接待を伴う飲食業」は存亡の機に瀕している。「接待を伴う飲食業」すなわちナイトクラブなどの社交料飲業は、従業員のジェンダー性を主な商品としながらも直接的な性風俗ではない点が日本独特であるといわれている。全国の繁華街のなかでも、とりわけ高級店が多い銀座のナイトクラブは接待交際費で飲食をする社用族に支えられてきた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大が懸念される限り、しばらくは社用族が銀座のクラブに戻ることはないだろう⁽¹⁾。

銀座の老舗高級クラブ「麻衣子」のオーナーママ雨宮由未子は、2012年に上梓した『寄り添う 銀座「クラブ麻衣子」四十年の証』の最後を「銀座の社交界の独特の文化を次の世代につなぐことができたら—それが今の私の願いです。」という文で締めくくっている⁽²⁾。筆者はこの最後の言葉に、銀座の社交料飲業を研究するうえでの様々な問題提起を投げかけられたような気がしている。まず、「銀座の社交界」なるものは存在するか、もし仮に存在するならば、それは本当に「独自の文化」なのだろうか、そもそも「文化」なのだろうか。感覚的には共感できる雨宮のこの言葉を学術的に論証していくことは極めて難しい。特に「麻衣子」のような会員制の高級クラブは一般人が足を踏み入れることができないため、参与観察やインタビューという方法を用いることは容易ではない。そこで筆者は、この勝手に抱え込んだ宿題を、文献研究という方法で調査したいと考えている。

ナイトクラブの前身は明治末期に登場したカフェ⁽³⁾であるというのが通説であるが、なぜ欧米から入ってきたカフェという飲食業態が、日本では従業員のジェンダー性を商品とする業態となって受容されていったのだろうか。筆者がカフェを研究する目的は、カフェが「女性による給仕を伴って」受容されていった要因を明らかにすることなのだが、本稿では調査の最初のステップとして、明治期から大正初期の銀座のカフェ黎明期に関する先行研究と

関連資料の整理をおこないたい。なお、当時の新聞記事等を引用する場合、今後の研究資料として活用することを念頭におき、できる限り旧字体のまま転記する。漢字表記が当て字として使用され、よみがなとは別の言葉でルビがふられている場合は、()内にルビを表記する。

1. 明治期～関東大震災前の銀座のカフェーに関する先行研究および参考資料

明治の近代化以降に発展を遂げた銀座は、現在までに3回の壊滅的な被害と復興を繰り返している。その3回とは、1872年の銀座大火、1923年の関東大震災、1945年の空襲である⁽⁴⁾。この3回のスクラップ&ビルドにあわせるように、銀座におけるカフェーの機能も変化する。銀座大火の後、銀座に煉瓦街が誕生して西洋的な街並みができた以降のカフェーは知識人が集うサロンの機能を持っていた。筆者はこの時期を「カフェー黎明期」と捉えている。1923年の関東大震災で銀座が焼け野原になると、その後はまちの復興とともにカフェー乱立時代へと突入した。やがて店舗間競争が激化し、エロサービスを売りにする店舗も現れ、「カフェーの大衆化」へと移っていく。関東大震災後のカフェーについては、多くの新聞雑誌記事やエッセー等があるが、カフェー大衆化期の資料についてはまた別の機会であらうこととし、ここでは「カフェー黎明期」に言及のある先行研究についてのみを整理する⁽⁵⁾。

(1) 研究者による先行研究

明治期から昭和初期にかけてカフェーを通史的に研究している最も重要な先行研究は、2018年に刊行された野口孝一による『銀座カフェー興亡史』(平凡社)である。長年中央区史の編纂に携わってきた野口は、カフェーの前身となる飲食業態にも言及しつつ、明治以降のカフェーの店名や出店場所、経営者や主な客まで詳細かつ時系列でまとめあげている。野口は同書のなかで女給と芸者の関係についても指摘しているが、野口の視点は銀座のカフェーの変遷であったために、給仕に関する考察や分析は重視されていない。筆者は、野口の先行研究を援用しながら、別の視点から銀座の女性史を研究したいと考えている。

もうひとつの主要な先行研究は、吉見俊哉による『都市のドラマトウルギー 東京・盛り場の社会史』(弘文堂1987)である。同書では銀座は関東大震災後を中心に書かれているが、関東大震災前に東京の「盛り場」の中心が浅草であったのに対し、震災後に銀座が台頭してきていた背景が分析されており、近代化以降の東京の繁華街の全体像を示している。ときに近視眼的になりがちな本テーマを俯瞰して眺めるためにも、同書は重要な先行研究である。

カフェーで働く女性たちに注目をした主な先行研究としては、2009年刊行の平山亜佐子による『明治大正昭和 不良少女伝 莫連女と少女ギャング団』(河出書房新社)がある。同書はカフェーで働く女性たちとその背景に関する事例紹介や分析が多数記されている刺激的な研究である。通史で分析されている点や少女たちの当時の立場に関心を寄せている点などが、筆者の問題意識と共通しており、示唆に富む先行研究である。平山の研究手法は新聞や雑誌など同時代メディアの分析であるため、資料集という点からも参考になる。

明治以降戦前までを通史で分析しているカフェーの既往研究のなかには、都市史や建築史の視点による研究もある。代表的な先行研究は、初田亨による『カフェーと喫茶店 モダン都市のたまり場』(INAX 1993)である。同書には建築史の観点から店舗の間取りや外観・内観の写真が多数掲載されており、当時の従業員や客の導線、オペレーションをイメージするためのヒントを与えてくれる。岡本哲志による『銀座四百年 都市空間の歴史』(講談社2006)は、近世から近代にかけての銀座の街並みの変化を都市史の視点から示してくれる。街並みという点では、赤岩州五等による『銀座 歴史散歩地図 明治・大正・昭和』(草思社2015)は、昔の地図と現在の街並みを照らし合わせながら見ることができ、店舗の立地を確認するための貴重な資料である。

(2) 同時代のエッセーや新聞雑誌記事等

カフェー黎明期に関する同時代の主な記録は、松崎天民(1878-1934)、永井荷風(1879-1959)など当時の文筆家たちによるエッセーや日記、新聞雑誌記事が中心である⁽⁶⁾。とりわけ、カフェー黎明期におけるカフェー内部の様子を詳細に伝える貴重な資料の多くは、松崎天民による新聞記事ならびにエッセー集である。永井荷風と銀座の関係につい

では、野口の前掲書に詳しい(野口、2018、164-184)。これらの資料を読む際に注意しなければならないことは、カフェ黎明期におけるエッセーの類は、一部資料を除いてほとんどが客である男性の立場からの記述であるという点だ。筆者が関心を寄せているのはカフェで働く女性たちであり、当時の資料を分析するときには、執筆者の立場に留意しながら内容を読み解く必要があるだろう。

カフェ黎明期には、研究者による調査はほとんど見られない。その理由は、大正期頃までは同時代の社会風俗を学術研究の対象とするという考え方そのものが一般的でなかったという点が大き⁽⁷⁾。そういう意味では、関東大震災前の1923(大正12)年2月に刊行された権田保之助による『社会研究 娯楽業者の群』(実業之日本社)は画期的な同時代の研究書である。ただし、内容は権田の随筆に近い文体で記されているため、当時の世相を記す資料として扱うべきであろう。以上の理由から、カフェ黎明期の店舗の様子については、松崎天民の記事を頼りにすることになる。当時の松崎天民は、いまでいう社会面の記者でありフードジャーナリストであった。新しくオープンした飲食店やバー、カフェなどに自ら足を運び、飲食店に関する記事を新聞に書いていた。松崎の記事をまとめた雑文集には、1913(大正2)年に創刊された『人生探訪』(磯部甲陽堂)がある。単行本は松崎天民の名で出版されているが、初出の記事を確認すると、実際の記事は「大食漢」というペンネームで書かれていたことが確認できた。本研究の極めて重要な一次資料であるため、大食漢(松崎天民)による記事を記しておく⁽⁸⁾。下記の記事には、店内の客層やオペレーション、給仕者の様子について記されているものも散見される。

- ・「カフェ (一) 銀座街頭の獅子吼」『東京朝日新聞』1911(明治44)年8月27日、6頁
- ・「カフェ (二) 西洋人の苦い顔」『東京朝日新聞』1911(明治44)年8月28日、6頁
- ・「カフェ (三) 日本三灰殻の二人」『東京朝日新聞』1911(明治44)年8月29日、6頁
- ・「カフェ (四) 描出す貨幣不足黨」『東京朝日新聞』1911(明治44)年8月30日、6頁
- ・「カフェ (五) 酒の香と文藝趣味」『東京朝日新聞』1911(明治44)年9月5日、7頁
- ・「カフェ (六) 十銭美味い喫茶店」『東京朝日新聞』1911(明治44)年9月6日、7頁
- ・「バーとホール (一) 塵埃臭い亀屋バー」『東京朝日新聞』1911(明治44)年9月13日、5頁
- ・「バーとホール (二) 銀座裏に正宗加六」『東京朝日新聞』1911(明治44)年9月14日、5頁
- ・「バーとホール (三) 刺戟の強い西村バー」『東京朝日新聞』1911(明治44)年9月15日、5頁
- ・「バーとホール (四) 女給仕の新橋ホール」『東京朝日新聞』1911(明治44)年9月16日、5頁
- ・「バーとホール (五) 謎蔵子迂呑巢の記」『東京朝日新聞』1911(明治44)年9月20日、5頁

2. カフェ黎明期における主要な店舗と社交料飲業的要素

(1) カフェ黎明期における主要な店舗

ここでは、まず、銀座のカフェ黎明期における主要な店舗について触れておく。野口は前掲書の冒頭で、日本で最初の喫茶店といわれている上野の可否茶館、日本橋川沿い西洋料理店メゾン鴻乃巢について言及したあと、銀座地区に登場した、函館屋、新橋ビヤホール⁽⁹⁾、資生堂飲料部、台湾喫茶店、カフェ・プランタン、カフェ・ライオン、カフェ・パウルスタについて解説をしている(野口2018)。これらの店舗について、業態、開業時期、開業地を下記に示しておく。

- | | |
|------------------|--|
| ・可否茶館(コーヒー・喫茶) | 1888(明治21)年4月14日開業(下谷区上野西黒門町 ⁽¹⁰⁾) |
| ・メゾン鴻乃巢(西洋料理) | 1910(明治43)年夏頃開業(日本橋川沿い鎧橋 ⁽¹¹⁾) |
| ・函館屋(氷牛乳洋酒・バー) | 1902(明治35)年の地図に掲載あり(尾張町二丁目九番地 ⁽¹²⁾) |
| ・新橋ビヤホール(ビヤホール) | 1899(明治32)年8月4日開業(南金六町五番地 ⁽¹³⁾ の新橋際東側角) |
| ・資生堂飲料部(ソーダ水・喫茶) | 1902(明治35)年開業(出雲町一番地 ⁽¹⁴⁾) |
| ・台湾喫茶店(烏龍茶・喫茶) | 1905(明治38)年12月開業(竹川町 ⁽¹⁵⁾) |

- ・カフェー・プランタン⁽¹⁶⁾ 1911 (明治44) 年3月頃開業 (日吉町二十番地⁽¹⁷⁾)
- ・カフェー・ライオン 1911 (明治44) 年8月10日開業 (尾張町交差点角⁽¹⁸⁾)
- ・カフェー・パウリスタ 1911 (明治44) 年12月12日開業 (京橋区南鍋町二丁目⁽¹⁹⁾)

店名に「カフェー」がついた最初の店が「カフェー・プランタン」であるため、日本初のカフェーといえば「カフェー・プランタン」というのが定説である。1911 (明治44) 年が「カフェー」と名の付く3店舗の創業年であることから、この年が銀座におけるカフェー元年と言える。これら3つの店舗の特徴を簡単に整理しておく。

カフェー・プランタンは、文士や画家のサロンであった。パリに憧れていた画家の松山省三が平岡権八郎らとの共同出資で創業し、維持会メンバー (クラブ会員の組織) に小説家、画家、俳優などが名を連ねた。カフェー・プランタンのあった場所は花柳界に囲まれた立地で、裏手には芸者置屋が軒を連ねており、常連客のなかには芸者もいた。給仕は女性によっておこなわれ、お柳やお鶴といった看板女給もいた。

カフェー・ライオンは、複合型の飲食店であった。尾張町交差点の角にオープンした3階建ての店舗である。1階がバー、2階がレストラン、3階が特別室3室という構成で、築地精養軒による経営であった。エプロン姿の女給を置いていたが、レストランがあったことや、交差点を走る路面電車の乗降場の近くという立地から、昼間の客層は多様であった。和髪に結いあげた女給が大きな白いエプロンをつけて給仕する様子が写真に残されている。

カフェー・パウリスタは、本格的なコーヒーを飲ませる喫茶店であった。ブラジルサンパウロ州政府の支援をうけ、本格的なコーヒーを出す店として開業された。オーナーはブラジル移民の開拓者の水野龍であった。他のカフェーとは異なり、男性による給仕だった⁽²⁰⁾。女給がない気軽さは、入りやすさでもあった。憩いの場や待ち合わせの場として多くの人に支持され、後の純喫茶につながる系譜の先駆けである。

(2) 社交料飲業的要素に関する考察

ひるがえって筆者は、現在のナイトクラブに続く流れを読み解きたいという立場から、社交料飲業に繋がる要素に着目して、これらの主要店舗を眺めてみようと思う。社交料飲業に繋がる要素とは、客同士が交流する「サロンの要素」と、女給による接客を商品化する「接待的要素」である。

1) サロンの要素：「メゾン鴻乃巢」に刺激されて開業された「カフェー・プランタン」

大食漢 (松崎天民) は、1911 (明治44) 年9月20日付け『東京朝日新聞』の「バーとホール (五) 謎蔵子迂呑巢の記」で、1910 (明治43) 年開業の「メゾン鴻乃巢」を記事にしている。記事のタイトルにある「謎蔵子迂呑巢」には「メイゾン、コウノス」とルビがふられている。面白おかしく当て字をつけたのであろうが、この記事以外にはこの当て字は見られない。

ところで「メゾン鴻乃巢」にはどのような魅力があったのだろうか。同記事によると、メゾン鴻乃巢のオーナー奥田駒蔵は、世界を周って料理とバーの研究した人物であるという。本場仕込みの西洋料理を提供し、本格的な洋酒も多種取り揃え、カクテルなども出していた。昼は兜町付近という立地から相場関係者が利用するが、夕暮れ時になると若い文士のたまり場となっていたようである。この記事に名前が挙がっていた人物を順番に列挙すると、正親町公和、武者小路実篤、里見淳、萱野二十一、志賀直哉、高村光太郎、木下空太郎、平出露花、吉井勇、永井荷風、生田葵山、小山内薫、市川猿之助、上田敏、島村抱月など、そうそうたる顔ぶれである。森鷗外が誰かに案内されて来たという伝聞も記されている。そしてついには「サターデーナイト」という会食会が組織されたと書かれている。「サターデーナイト」について述べている箇所を、下記に示しておく。

これ等の文士と交はると浅からず、遂に土曜日の夜 (サターデーナイト) と云ふ會食會を組織して、毎土曜日は午後六時より十一時まで、何人でも會費一圓で、約十品の特別料理を出すと云ふ、文壇の一部でも、コオノスのサターデー、ナイトと云へば、自分等の會合日でもあるかの様に心得て、期せずして各方面から集合するとか、文藝委員會からの歸途、上田敏博士も立寄つた事があれば、森鷗外先生なども、誰かに案内されて来られたとか、晝が相場師で夜は文學者、如何にも面白い對照 (コントラスト) である。

まさに文士のサロンである。「サターデーナイト」なる会の誕生により、おのずと土曜の夜だけは会員制クラブ化していた様子うかがえる。松山省三たちはメゾン鴻乃巢に大いに刺激され、翌年銀座に「カフェ・プランタン」を開業したのであった(野口2018、15、45)。実際に、カフェ・プランタンの維持会のメンバーには、メゾン鴻乃巢の常連たちの名前が多い。たしかに、松崎は、前掲の新聞記事を「日本の文學者も合わせなり、貨幣不足党(カフェ・プランタン)と迷蔵子迂呑巢(メイゾンコウノス)の二つを持つて居れば、當分飲み食ひには困らない、酌する女の顔なんかは、問題外にして然るべし」と締めくくっている。女給目当てではなく、文士仲間たちのサロンとしての機能が「メゾン鴻乃巢」と「カフェ・プランタン」の魅力だったのである。

2) 接待的要素：最初に女給をそろえた「台湾喫茶店」

「台湾喫茶店」は最初に女給をおいたといわれている店である。当時はまだ珍しかった烏龍茶を飲ませる喫茶店であったため「ウーロンチー」とも呼ばれていた。「台湾喫茶店」の経営者は中澤安五郎であるが、店主として店を切り盛りしていたのは女性であった。中澤安五郎と女店主との関係について、詳しいことはわからない。この女店主は、1922(大正11)年12月8日付『大阪朝日新聞』台湾版の「銀座の烏龍茶(下)烏龍茶の謂れ因縁」という記事で、「おかみさん」として記者の取材を受けている。この記者は、おかみさんが「ウーロンチーが日本に於ける所謂カフェなるものの元祖である事や、前例のない日本娘に適したエプロンを造るのに人知れぬ苦心した事や女給と云うものを使ったのも最初である事やさては此おかみ独特の客待遇論、客質論、女給論など」を答えたと書いており、「台湾喫茶店」が自他ともに「女給を使った最初」の店として認知されていたことがわかる。

しかし、この記事を読んだとき、筆者には素朴な疑問が生じた。「初めて女給を使った」とは、はたして何が初めてだったのだろうか。当時、日本料理店では当たり前のように女性が給仕をしていたし、明治期の絵葉書や風刺画などを見る限り、ミルクホールでも牛鍋屋でも女性による給仕は行われていた。「台湾喫茶店」が女性に給仕をさせた初めてであるとは思われない。女性による給仕が、1905(明治38)年創業の「台湾喫茶店」以前からおこなわれていたことは、大食漢(松崎天民)による「バーとホール(四)女給仕の新橋ホール」『東京朝日新聞』1911(明治44)年9月16日に確認することができる。そこには、1899(明治32)年創業の新橋ビヤホールで、既に女性による給仕がおこなわれていたことが記されている。該当箇所には、次のような記載がある。

カフェやバーは未だ出来初めて、其の完全なものを求めるには、今後二三年を要し様が、ビヤホールに至つては、今を去ること十二三年前よりして、既に都の一景物たり、加之に二十歳前後の女(メード)が居て、S巻、W巻、女優巻、マガレットから銀杏返し、時あつては高髻の娘々したのが出て、お酌も敢えて辞せぬと云ふので、両道かけた男を吸う、新橋際のビヤホールも、正に確かに其の一つ(中略)女給仕(メード)の顔は十八九の若かるべき妙齢ながら、半襟の垢にも著き不如意の影を何と読むか、酔つた人は他愛なく「おい、お艶さん、お前の情夫は死んだのかい」など、大きく揶揄ふのも、この場のさかなにせんが爲めか(中略)斯うした酔客を扱つて、萬般の手落無からんとする女給仕(メード)たるも、考へて見ればまた難いかな、新聞の続物やら、半襟やら帯側なんかに、僅かに慰めて居る間は、娘の罪も浅いけれど、往さ来るさのハイカラさんと何時しか戀に落ちたりして、家に母在すを忘れ、三越に自転車乗る弟有るを忘るに至らば、お春さんでもお秋さんでも、其の行末が案じられるに、まアあの苦勞も無氣に笑ふことよ

この記事を読む限りでは、新橋ビヤホールの女給仕もカフェの女給も仕事内容に大差は無さそうである。松崎は1920(大正9)年刊行の『女人崇拜』(精禾堂)のなかで、次のように述べている(松崎、1920、240)。

日本の東京に、カフェが初めて出来たのは、明治四十一二年の頃であつた。京橋日吉町の國民新聞前に、松山省三君が経営して居るカフェ・プランタンが、其の日本最初のカフェであつた。然し其の前から、尾張町には中澤君の経営して居る臺灣喫茶店があつた。新橋際や京橋際には、ビヤホールもあつた。明治四十年の東京

博覧會には、カフェーらしいビヤホールが、二軒も三軒も出来たりした。たゞカフェーと云ふ名で、日本に最初に開業したのが、日吉町のプランタンであつたように思はれる。私はさうしたカフェーで、日本最初のカフェー女を、死んだお柳さんや、今は何処に居るか判らぬお鶴さんに眺めた。次で尾張町の四つ角、元の東京毎日新聞社跡に、カフェー・ライオンが出来て、そこにも多くのウエートレスが、エプロンの白い胸に、濃化粧の姿を見せるやうになつた。私はそこでも、数多いカフェー女の情話や哀話を見聞した。

松崎は、カフェー黎明期から約20年以上が経過した1927(昭和2)年頃に、当時をふりかえり銀座のカフェーに関する論考をいくつか書いている。そのひとつ、雑誌『騒人』の1927(昭和2)年10月号に掲載されている「現代カフェー大観 附カフェー女の過去と現在」では、松崎のカフェーの女給に関する考え方が示されている。該当部分を下記に引用するが、現時点は初出の雑誌を入手できていないため、オンデマンド出版、松崎天民『東京カフェー探訪』(リキエスタ会、2011、51-52)より転記する。

明治三十九年の晩秋、十年目に上京した私の前に、ビヤホールとして栄えて居たは、京橋際のカフェーホールであった。京橋のホールには、下町風の装いした若い女が居て、ビールのお酌をして居たが、それを東京に於ける、否、日本に於けるカフェー女の濫觴とは云えない。カフェーとは何んなものか、バーとは何う云う風なものか、夢想だにせぬ時代であった。私達が夕暮れになって一杯飲もうと云うことになれば、とり屋か牛屋にあがって、へべれけるより仕方の無い時世であった。その頃は電車とて、上野浅草線、外濠線の他は、青山一丁目まで、新宿線が塩町まで、天現寺線位しか、開通して居なかつた。

そこへ出来たのが、銀座は天賞堂前の台湾喫茶店で、例のウーロン茶を、芭蕉菓子一皿附十銭で提供して居た。洋酒四五品を置いてカクテルも造り、仏蘭西風の洋食も食べさせたが、これが銀座に於けるカフェー又はバーの嚆矢ではなかつたらうか。恐しく奥深い構えで、正面の帳のかかった特別室には、支那風の装飾を施してあったが、私はそこに竹越興三郎氏の姿を見たり、後藤新平氏の鼻眼鏡を見たりした。その頃は、靴の儘で出入の出来ると云うことが、何んなに愉快でもあり、便利にも思われたものであろう。落書帳のようなものが備え付けてあって、松本君だの、平だの、吉野左衛門だの、杉村楚人冠だの、松平子爵の何とかだのが、面白い文句を書いて居た。女給としては、お鈴、お幸、その他二三人が居て、笑顔を見せて居たが、喫茶店、カフェーの女としては、これ等の人々が、第一歩を踏み出したのかも知れなかつた。(下線筆者)

浅草の並木には、吉永良延翁のよか楼が在って、西洋料理の民衆化に努めて居たが、そこにも美人の女給達が七八人も居て、レストランの美人女給として、若い人達の興味を唆って居た。それでも飲食の世の中は、牛屋時代全盛であって、いろはとか常盤とか、吉川とか、松喜とか、そうした方面の「女」の方が、書生仲間の取沙汰にのぼって居た。そこへ最初に出来たのが、京橋日吉町の国民新聞社前は、カフェープランタンであった。

松崎は「下町風の装いした若い女」がビールの酌をしたのでは、「カフェー女」とは言えないと述べている。この発言は「カフェーの女給」が、カフェー黎明期には記号化されていたことを示すものである。「カフェーの女給」がもつ記号性については、筆者の研究関心の中核となる部分であるため、今後慎重に資料分析を重ねていくこととし、ここで結論を出すことは避けたい。また松崎は、カフェー黎明期における女給の登場を、同じ1927(昭和2)年に刊行された『銀座』(銀ぶらガイド社)の中で、「第一期女給時代」と表現している⁽²¹⁾。松崎は女給について第二期、第三期を明確な区分を示しているわけではないが、彼が何をもって「第一期」としたのかについて、さらに調査を進めていくこととする。その際には、松崎は客側の視点で分析しているという点にも、留意したい。

3. 元芸者の「台湾喫茶店」おかみさんと米国セントルイス万国博覧会(1904年)

女性が文筆側に立つ機会がほとんどなかつたカフェー黎明期において、「台湾喫茶店」のおかみさん取材した『大阪朝日新聞』台湾版「銀座の烏龍茶」の記事は貴重である。この記事は3日間にわたって連載され、執筆者名は「K生」

となっている。各記事のタイトルと掲載日時を示しておく。本資料は神戸大学付属図書館新聞記事文庫に所蔵されており、オンライン上で自由に閲覧することができる。なお、掲載面は不明である。

- ・「銀座の烏龍茶(上) 臺灣の民主的宣傳者」『大阪朝日新聞』臺灣版、1922(大正11)年12月6日
- ・「銀座の烏龍茶(中) 貴族名士學生の俱樂部」『大阪朝日新聞』臺灣版、1922(大正11)年12月7日
- ・「銀座の烏龍茶(下) 烏龍茶の謂れ因縁」『大阪朝日新聞』臺灣版、1922(大正11)年12月8日

「台湾喫茶店」のおかみさんは、烏龍茶を飲ませる店をはじめたきっかけについて、次のように語っている。(前掲記事「銀座の烏龍茶(上) 臺灣の民主的宣傳者」より)

別に大した抱負も目的もあつた譯ぢやないのですがその頃は全く烏龍茶と云ふものが内地に知られて居ませんでしたから聊かそれを紹介したいと云ふ志を起した譯ですの、其志を起した原因はつて?中々御詮索が厳しいですね、それは先年米國でセントルイスの博覧會が御座いましたでせう、あの時農商務省では日本茶と烏龍茶の宣傳をする爲に喫茶店を開かれたのですが私共は米國に行つて居りました關係から其喫茶店の經營を引受けました、之が烏龍茶にかかはりを持つ抑の初めでした

確かに、1904(明治37)年4月8日の『東京朝日新聞』2面には、「喫茶店接待婦人渡米」の記事があり、そこには「山口鐵之助氏は聖路易(セントルイス)博覧會に於ける喫茶店の接待員として十五名の婦人を引率し昨日横浜解纜の亞米利加丸(アメリカまる)にて出發せり」との記載がある。千葉の茶業家であった山口鐵之助は、セントルイス万博での喫茶店出店を商機ととらえ、私費を投じたうえに農商務省に支援を要請し、仲間と共にセントルイス万博での喫茶店営業を成功させたようである⁽²²⁾。おそらくその仲間の中には、中澤安五郎がいたのだろう。おかみさんが「私共」と答えているのは、経営者である中澤安五郎を指している。中澤は1904年にアメリカのセントルイス万国博覧會で日本館の喫茶店を担当していた人物である。1904年のセントルイス万国博覧會開催中に米国滞在中であった永井荷風は、現地でこのおかみさんと顔見知りになっていたようだ。1931(昭和6)年11月3日の永井荷風の日記によると、永井が1908(明治41)に偶然銀座でこの女性(おかみさん)と再会したとあり、その頃のことを回想している。該当部分を抜き出し、以下に転記する。

夜銀座に行き眼鏡屋松島にて老眼鏡を修繕せしむ。尾張町四つ角のライオン酒館今年初夏の頃にや一時閉店せしがこの程に至り臺灣喫茶店の跡を改築し以前の如くカツフェーを開業したり。臺灣喫茶店はいづこに移りしにや知らず。此店の主婦⁽²³⁾は若き頃新橋の妓にて明治卅七年頃米國セントルイスに萬國博覧會開催の時日本賣店の中茶業組合の賣店に雇はれゐたり。同行の藝者数名あり。其中一名は電車で轢殺されたり。余その頃米國に在り。博覧會には三個月ほど遊びゐたりし故これ等の事を知れるなり。茶業組合は其年の末博覧會閉場と共に茶汲の藝者をも本國に還送したり。銀座臺灣喫茶店は余が在米中にできたものなれば開店の事は委しく知らず。明治四十一年に至り余は偶然銀座の店頭にて其の主婦に逢い始めて米國博覧會當時の事を語り聞かされたり。守田勘彌の姉玉三郎といふ女優も當時渡米せしが急病にて客死せし由。此も喫茶店の主婦より其時聞きし話なり。臺灣喫茶店の最繁昌せしは明治四十三四年頃なるべし。茶汲の女七八名いづれも美人にてライオン酒店の女ボーイと並びて嬌名を走せたり。其頃は女給とは云はず女ボーイと云ひしなり。カツフェーの名も猶耳馴れず多くはビヤホールと云ひしなり。舊新橋停車場前に有樂軒と云ひし洋食屋にも美人を多く置きたり。祝儀拾圓より拾五圓位にて客の意にしたがひし由。其頃人の噂なり。銀座通の商店も日々知らぬ間に變り行くことに頗急なれば茲に記載して備忘となす。

(永井荷風、1964、174-175)

この永井の日記から、「台湾喫茶店」のおかみさんは、セントルイス万国博覧會に接待員として洋行した新橋芸者の

ひとりだったことがわかる。1904年のセントルイス博覧会における日本館での芸者については楠元町子による論文が詳しい(楠元、2007、2012、2018)。

セントルイス万博で成功を収めた中澤安五郎は、帰国後1905(明治38)年10月に、日比谷公園内に設けられた喫茶店の運営を任されたことが、1905(明治38)年10月13日の『東京朝日新聞』に書かれている⁽²⁴⁾。中澤が烏龍茶を提供したかどうかについては記載がないが、この記事には「婦人八人も篤志を以て奮つて之に従ふ旨申出たり云ふ」とある。はたして、この8人のなかにおかみさんは含まれていたのだろうか。中澤が「台湾喫茶店」を開業したのは、この年の12月28日のことである。開業の2日前、1905(明治38)年12月26日付『東京朝日新聞』7面に、台湾喫茶店の開業を告知する小さな記事を見つけた。ここにその記事の全文を引用する。

●台湾喫茶店の開設

台湾産出烏龍茶は一種特優なる芳香ありて各種外國紅茶よりも風味優尚なるは夙に歐米人の認むる所なるに却て邦人にして未だ此好飲料あるを知る者稀なるを遺憾とし且は汎く烏龍茶の眞味を紹介して世の嗜好を誘致し以て臺地殖産の發展を謀らんとする趣意より中澤安五郎主任として今回新橋竹川町大通に臺灣喫茶店を開設し設備は勿論精茶供用の方法等従來の賣茶店とは異り頗る高尚且輕便にして紳士淑女の休憩に適する様仕組たる由開業は十二月二十八日午後六時よりなりと

以上、当時の新聞記事や松崎、永井による記録から、最初に女給をおいたとされる「台湾喫茶店」誕生の経緯が見えてきた。その現場を切り盛りしていた女性が元新橋芸者であったこと、彼女がアメリカのセントルイス万国博覧会において世界各国の人々を接客したのちに「台湾喫茶店」の現場を指揮したこと、この事実を接客における日本近世と西洋文化の遭遇であったと捉えることはできないだろうか。

飲食業における「業態」の変遷とは別に、「接客スタイル」の変遷をつかもうとする筆者の目論みは、いまここに始まったばかりである。「銀座の社交界の独特の文化」とは何か。この宿題にもどりたい。どれだけの時間がかかるのか、現時点では皆目見当もつかないが、筆者はこの宿題に文献研究という方法で挑むことにする。銀座におけるカフェー黎明の資料を整理した限りにおいては、それなりの手ごたえを感じることができた。

注

- (1) 2020年12月25日、財界人に顧客を持つ高級クラブ「サロン・ド・慎太郎」が実店舗を閉店した。オーナーの矢部慎太郎氏は2020年12月21日付のInstagram (@ginza.shintaro) で閉店の理由をコロナであるとしたうえで、「危機管理と言う観点では数年は財界のお客様は銀座にお出になりません。」と述べている。(2020年12月21日アクセス)
- (2) 雨宮2012、p324。雨宮は創業から四十周年を迎える直前、2011年3月11日に東日本大震災がおきたことをきっかけに、四十年の軌跡を書籍として残すこと決めたという(雨宮、2012、3)。同書の第一章は「麻衣子」の顧客62名の手記で構成されており、第二章には「麻衣子」の歴史が記されている。「麻衣子」に密かな憧れを抱いていた筆者は、本屋で同書を目にしたときに、とても複雑な気持ちになったことを覚えている。マスコミにほとんど出ることのない「麻衣子」が本を出したという驚き、紹介者がいなければ入店することすらできない高級クラブを覗くことができるという好奇心、そして「麻衣子」が店の歴史を残そうと思うほどに銀座の夜が変わりつつあるという時代の流れを感じたのだった。銀座の夜のにぎわいは、新型コロナウイルス感染拡大以前から2008年のリーマンショック、2011年の東日本大震災をきっかけに、その勢いを失っていたのである。
- (3) 現在の一般飲食業である「カフェ」との混同を避けるため、女給による給仕を伴う戦前の飲食業態を示す言葉として「カフェー」という表記を使用する。
- (4) 東日本大震災後の老朽化したビルの建て替えを4回目のスクラップ&ビルドとみることもできるだろう。この4回目のスクラップ&ビルドは、新型コロナウイルスの感染拡大によりストップしている。銀座の現況および今後については、また別の機会に検証することにした。
- (5) 関東大震災後の銀座の飲食業態の変遷という点では、福田育弘による2014年の論文「外食の大衆化と飲食空間のジェンダー化—関東大震災後の飲食場の再編成—」を挙げておきたい。福田の関心は飲食文化の変容であり、福田は同論文の中で百貨店に登場した女性およびファミリー向けの食堂と、震災後に乱立した男性客向けのカフェーを対比的に語ることで、飲食業態が「女性向け」「男性向け」とジェンダー化される過程を示している。
- (6) 関東大震災後には、『女給』の著者である廣津和郎、『女給』に登場する文豪のモデルとなった菊池寛などの名を挙げることもできるが、彼らは「カフェー黎明期」の客層よりも一世代後になる。

- (7) 関東大震災後になると銀座に新たな街並みが登場するとともにカフェが乱立しはじめる。この時期は、今和次郎が「考現学」を提唱した影響などもあり、同時代の社会風俗を観察することを学問とし扱おうとする風潮がおこり、いくつかの研究が発表されるようになった。今和次郎自身も銀座のカフェの女給にも関心を寄せ、今和次郎の『新版大東京案内』（中央公論社1929）のほか、カフェの女給の服装をスケッチを残している。津金澤聰廣・土屋礼子編著『大正・昭和の風俗批評と社会探訪—村嶋歸之の著作選集 第1巻 カフェ考現学』（柏書房2004）に所収されている村嶋歸之の『カフェー 歡樂の王宮』（文化生活研究会1929）と『カフェー考現学』（日日書房1931）にはカフェーと女給の様子が詳細に記されており、貴重な同時代史料となっている。
- (8) そのほかに松崎は、1913（大正2）年3月から4月にかけて、「天民」という名で「銀座界限」という20回に及ぶ連載を書いている。各記事のタイトルは次の通りである。
- 「銀座界限（一）松喜の牛鍋から」『東京朝日新聞』1913（大正2）年3月25日、5頁
 - 「銀座界限（二）長寿庵の母娘連」『東京朝日新聞』1913（大正2）年3月26日、5頁
 - 「銀座界限（三）橋上に乞食の群」『東京朝日新聞』1913（大正2）年3月27日、5頁
 - 「銀座界限（四）万華に漂泊の女」『東京朝日新聞』1913（大正2）年3月28日、5頁
 - 「銀座界限（五）謎の正宗ホール」『東京朝日新聞』1913（大正2）年3月31日、5頁 ※（六）と誤記されている
 - 「銀座界限（六）ライオンの一夜」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月1日、5頁
 - 「銀座界限（七）土産話の天麩羅」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月3日、5頁
 - 「銀座界限（八）喫茶店の落書帖」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月5日、5頁
 - 「銀座界限（九）名人揃の玉突屋」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月6日、5頁
 - 「銀座界限（十）輪転機の響く頃」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月9日、5頁
 - 「銀座界限（十一）女髪結の名手揃」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月10日、5頁
 - 「銀座界限（十二）新空気の不足党」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月11日、5頁
 - 「銀座界限（十三）廿五銭の演芸館」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月12日、5頁
 - 「銀座界限（十四）南鍋町の交詢社」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月14日、5頁
 - 「銀座界限（十五）結婚化粧の名家」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月16日、5頁
 - 「銀座界限（十六）表待合と裏待合」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月17日、5頁
 - 「銀座界限（十七）尾張町の新聞売」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月21日、5頁
 - 「銀座界限（十八）色彩濃き小売店」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月22日、5頁
 - 「銀座界限（十九）繁昌は春の夜店」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月24日、5頁
 - 「銀座界限（二十）苺の煙と神の道」『東京朝日新聞』1913（大正2）年4月25日、5頁
- (9) 正式な店名は「恵比寿ビール Beer Hall」、日本麦酒株式会社経営。日本で最初のビヤホールである。一般には「エビスビヤホール」や「新橋ビヤホール」で知られている。
- (10) 現在のの上野1丁目。
- (11) 現在の日本橋茅場町付近。
- (12) 現在の銀座7丁目。銀座通り西側。
- (13) 現在の銀座8丁目。
- (14) 現在の銀座8丁目。現在の資生堂パーラーがあるところ。
- (15) 現在の銀座7丁目。銀座通りの西側。
- (16) なお、店名の由来については、野口によると開業時期が「春（フランス語で printemps）」だったからで、命名者は小山内薫と言われている（野口、2018、45）。ちなみに、1911（明治44）年8月7日付『東京朝日新聞』、「新熟語辞彙 カフェープラントーン」には、面白おかしく次のように書かれている。なお、ここでは読みやすさを重視し、現代仮名遣いに改める。「カフェープラントーン：日吉町にあるイタリア料理店の名にて「貨幣足らん足らん」という意味なり。語の起因は店の主人が一人では資本が出来ず仲間の文士画家を語らい会社組織にて開業したるがいづれも当世の非金満家党なれば毎日鼻突き合わせて貨幣足らん足らんと口癖のように云いたるが世間体をはばかりカフェープラントーンと片仮名にて合言葉としたるより起これり。一説にカフェーは嘉兵衛なり、プラントーンはチャランポラーンなり、むかし高田屋嘉兵衛が異国人と交易し飲食一に異国の風にならぬ、いいかげんの事を云って当時の国民を驚かしたるよりこの類の飲食店を模してこういふに至りと云う者あり。またブラリグラリの転化せるものなり等、知ったかぶりの説明をなすものあれど、何れも牽強附会のチャランポラーンにて一も信ずるに足らず。」この記事を読んでも名前の由来ははっきりしないが、カフェープラントーンは開業当初から「貨幣不足党」などと漢字をあてられることがあったことがわかる。大食漢（松崎天民）による記事「カフェー（四）描出す貨幣不足黨」が『東京朝日新聞』の1911（明治44）年8月30日号に掲載されていることから、名前の由来に関する当該記事は松崎天民によるものと推測できる。
- (17) 現在の銀座8丁目6番地内、並木通り東側に面したところ。
- (18) 現在の銀座4丁目交差点西西南角。現在GINZA PLACEがある場所。
- (19) 現在の銀座7丁目。
- (20) 野口2018、p74
- (21) 松崎1927、p83
- (22) 『東京朝日新聞』1902年3月13日3頁および『東京朝日新聞』1903年6月16日2頁による。

(23) 当時「主婦」という言葉は主に女主人という意味で使用されていた。ここではおかみさんという意味で使用されていると思われる。

(24) 『東京朝日新聞』1905年10月13日3頁による。

参考文献

- 赤岩州五編著、原田弘 井口悦男監修、2015、『銀座 歴史散歩地図 明治・大正・昭和』草思社
- 雨宮由未子編著、2012、『寄り添う 銀座「クラブ麻衣子」四十年の証』講談社ビジネスパートナーズ、中央区・中央区女性史編さん委員会、2007、『中央区女性史 いくつもの橋を渡って<通史>』ドメス出版
- 福田育弘、2014、「外食の大衆化と飲食空間のジェンダー化—関東大震災後の飲食場の再編成—」『早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究(人文科学・社会科学編)』第62号、pp289-306
- 銀座社交料飲協会、2005、『銀座社交料飲協会八十年史』非売品
- 銀座六丁目町会、1981、『銀座六丁目小史』非売品
- 権田保之助、1923、『社会研究 娯楽業者の群』実業之日本社
- 初田亨、1993、『カフェーと喫茶店 モダン都市のたまり場』INAX
- 平出鏗二郎、2000、『東京風俗志 下』ちくま学芸文庫(筑摩書房)
- 廣津和郎、1933、『女給』改造文庫
- 石角春之助、1984、「銀座解剖図 第一篇 変遷史」『近代庶民生活誌②盛り場・裏街』三一書房、pp286-332
- キリンビール編、1984、『ビールと日本人 明治・大正・昭和 ビール普及史』三省堂
- 今和次郎編、1929、『新版大東京案内』中央公論社
- 近藤経一、1919、『第二の誕生』天佑社
- 楠元町子、2007、「万国博覧会の展示と世界観の形成—1904年セントルイス万博を中心に—」『日本生涯教育学会論集』第28号、pp1-10
- 楠元町子、2012、「万国博覧会に見る明治政府の国際戦略—1902年ハノイ博覧会と1904年セントルイス万博を中心に—」『愛知淑徳大学 論集—文学部・文学研究科篇—』第37号、pp.105-120
- 楠元町子、2018、「思考力・判断力を育てる歴史の授業—1904年セントルイス万博と「人間の展示」—」『愛知淑徳大学論集—文学部篇—』第43号、pp69-86
- 松崎天民、1913、『人生探訪』磯部甲陽堂
- 松崎天民、1915、『人間世間』磯部甲陽堂
- 松崎天民、1920、『女人崇拜』精禾堂
- 松崎天民、1927、『銀座』銀ぶらガイド社
- 松崎天民、2002、『銀座』ちくま学芸文庫(筑摩書房)
- 松崎天民、2011、『東京カフェー探訪』リキエスタ会
- 南博・落合重信・三田純市・竹島昌威知・林英夫編、1984、『近代庶民生活誌②盛り場・裏街』三一書房
- 村嶋歸之、1929、『カフェー 歓楽の王宮』文化生活研究会
- 永井荷風、1964、『永井荷風全集 第20巻 断腸亭日乗：2』岩波書店
- 永井荷風、1987、『つゆのあとさき』岩波文庫(岩波書店)
- 永井荷風、2002、『あめりか物語』岩波文庫(岩波書店)
- 日本風俗史学会編、1979、『日本風俗史辞典』弘文堂
- 野口孝一、2018、『銀座カフェー興亡史』平凡社
- 岡本哲志、2006、『銀座四百年 都市空間の歴史』講談社
- 谷崎潤一郎、1954、「痴人の愛」『現代日本文学全集18 谷崎潤一郎集』筑摩書房
- 津金澤聰廣・土屋礼子編著、2004、『大正・昭和の風俗批評と社会探訪—村嶋歸之著作選集 第1巻カフェー考現学』柏書房
- 柳田國男、1931、『明治大正史 世相篇』朝日新聞社
- 柳田國男、1967、『明治大正史 世相篇』平凡社
- 柳田國男、1993、『明治大正史 世相篇 新装版』講談社学術文庫(講談社)
- 吉見俊哉、1987、『都市のドラマトウルギー 東京・盛り場の社会史』弘文堂